笑顔による集団間バイアス是正効果の検討

○樋口匡貴¹ 野間孝太²

(上智大学総合人間科学部¹ 日本甜菜製糖株式会社²)

Key words: laugh, smile, intergroup biases

目 的

他者からの信頼のシグナルとして笑顔が機能することが知られている。たとえば Scharlemann, Eckel, Kacelnik, & Wilson (2001) は信頼ゲームを用いて検討を行い、笑顔の顔写真によって相手に提示されたプレイヤーは真顔の場合よりも多くの獲得金額を得たことが示された。また日本において同様の検討を行った大藁・森本・中嶋・小宮・渡部・吉川 (2010) は、女性の場合のみ笑顔表出が真顔よりも信頼の獲得につながることを示した。

この笑顔には区別可能な複数の表出形態がある。その一つが笑顔 (laugh) と微笑 (smile) である (エクマン & フリーセン, 1987)。しかし笑顔と信頼の関連を検討した先行研究では基本的に笑顔対真顔の比較を行っており、その中間にあたる可能性がある微笑については未検討である。そのため、信頼に及ぼす笑顔の効果が微笑の場合にまで適用できるかどうかは不明である。そこで本研究では、笑顔が持つ信頼獲得効果について、微笑についても検討を行うこととする。

さらに先行研究で示されてきた笑顔の信頼獲得効果については、その適用範囲が不明である。Tajfel, Billig, Bundy, & Flament (1971) によって、最小条件集団パラダイムによって分けられたまったく意味のない集団間においても、内集団成員に対しては多くの分配を、外集団成員に対しては少ない分配をするという集団間バイアスが指摘されている。笑顔が信頼を獲得することを報告した先行研究における笑顔表出者は、その集団成員性は明確にはされておらず、笑顔の効果が外集団成員であった場合にも有効なのかどうかは不明である。外集団成員に対する信頼ゲームの提供額は内集団成員よりも低くなると予想されるが、笑顔による信頼獲得効果が外集団成員にも適用されるのであれば、外集団成員であっても内集団成員と同程度の獲得が可能になるかもしれない。すなわち、笑顔が集団間バイアスを是正する可能性である。

以上のことから本研究では、信頼ゲームにおける対戦相手の表情 (笑顔, 微笑, 真顔) によって、集団間バイアスが是正されるかどうかを検討することを目的とする。

方 法

実験参加者 大学生 135 名 (男性 27 名, 女性 107 名, 不明 1 名, 平均年齢 20.13 歳)。

実験計画と手続き 表情 (笑顔 / 微笑 / 真顔) × 集団成員性 (内集団 / 外集団) の 2 要因参加者間計画であった。実験は冊子を用いて大学の教室で集団で行った。絵画嗜好性課題を用いた最小条件集団パラダイムで群分けを行った後、3 表情のうちいずれかを示す女性の写真を提示した。その際、その女性の絵画の好みを示すことで集団成員性の操作を行った。その後、写真の女性との信頼ゲームを行わせ、第 1 プレイヤーとしての選択を行わせた (0-1000 円)。

結 果

各条件における信頼ゲームでの提供額を Fig. 1 に示した。この得点について 2 要因分散分析を行ったところ、表情の主効果 ($F(2, 129) = 0.449, p = .639, \eta_p^2 = .007$), 集団性の主効果 ($F(1, 129) = 1.413, p = .237, \eta_p^2 = .011$),

交互作用 ($F(1, 129) = 1.143, p = .322, \eta_p^2 = .017$) のいずれも有意とはならなかった。

各表情における集団間バイアスの程度を検討するために、各表情における集団成員性の単純主効果の検定を行った。その結果、真顔条件では集団間の獲得金額の差が大きかった一方で ($p = .057, \text{Hedge's } g = .571$), 微笑条件 ($p = .980, \text{Hedge's } g = .008$) および笑顔条件 ($p = .909, \text{Hedge's } g = .046$) では集団間の差が消失した。

Fig. 1 各条件における信頼ゲームの提供額。
(エラーバーは標準誤差)

考 察

本研究の結果、対戦相手が真顔であった場合には、内集団と外集団とで信頼ゲームにおける提供額に大きな差があった一方で、笑顔あるいは微笑を示した対戦相手の場合には内外集団での提供額の差が消失することが示された。すなわち、笑顔および微笑は集団間バイアスの是正に有効である可能性が示唆された。

しかしながらその是正の方向性は必ずしも望ましいものではなく、笑顔および微笑表出条件における内集団成員の被提供額は、真顔条件での外集団と同程度に低いものであった。すなわち笑顔 (微笑) の表出は、外集団成員の獲得を促進したのではなく、内集団成員の獲得を阻害することで集団間バイアスが是正されたのである。

この結果は、以下の 2 点から解釈可能である。まず 1 点目は本研究で用いたゲームの種類である。本研究では相手からの裏切りの可能性を考慮する信頼ゲームを用いたが、純粋な利他行動や協利行動を測定した場合にはまた異なる結果が得られる可能性がある。また 2 点目はサンプルの特性である。本研究の実験参加者 135 名のうち女性が 107 名であり、本研究の結果は大きく女性による傾向を反映しているだろう。McKeown, Sneddon, & Curran (2015) によると、女性は女性による笑顔を事実よりもより偽笑顔だと判断する傾向がある。本研究で用いた刺激は女性による表出であったが、この知見と合わせて考えると、内集団成員であった場合にもより偽笑顔であり信頼できない相手だと判断された可能性がある。今後は笑顔自体の信憑性を考慮しつつ、表出者および評価者の性別を検討の対象としていく必要があるだろう。

(Masataka HIGUCHI, & Kota NOMA)